

# 学校評価報告書 令和2年度 横浜市立獅子ヶ谷小学校

重点取組分野	2年度		
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	<p>①低学年、中学年、高学年、そして中学校へのつながりを意識した学習指導を行う。</p> <p>②本校の特色を生かした授業づくりを行い、児童が主体的に考え、意欲的に学び続ける力を育む。</p> <p>③児童が様々な情報や知識を相互に関連付け、物事を深く考える力が身につくような授業を行う。</p>	<p>①今年度の情勢を踏まえ、全体での研究授業は行わなかった。メンター研や年次研の授業研を行ったり、研究推進だよりを発行したりして、職員間で学習指導について共有した。</p> <p>②学年ごとに実態に応じた学習課題を設定した。習熟度別クラスの設定や教科担任制を取り入れた。</p> <p>③パソコンやタブレットを活用して、情報を収集したり選択したりして調べ学習を行った。調べたことを新聞や放送で全校に発表できる授業づくりを行った。</p>	B
生きてはたらく知	<p>①挨拶の良さを実感できる取り組みを実践し、温かい雰囲気づくりをする。また、進んで挨拶する児童を積極的に評価し、自己肯定感を高める。</p> <p>②様々な授業で多様な価値観を認め合うことを大切にした教育活動を継続的にを行い、子どもたちが多様性を認め合える素地を培う。</p> <p>③地域の方々とふれあい、地域の方の温かさや優しさにふれ、地域愛を育てる学習を展開する。</p> <p>④年間計画に沿って道徳の授業を行い、道徳的価値を把握して実践しようとする児童の意識を高める。また、職員研修を効果的にを行い、職員の人権感覚を維持する。</p>	<p>①委員会活動で挨拶運動に取り組み、職員も登下校時の指導で、気もちのよい挨拶を誘発し、自発的に挨拶できた児童を褒め、自己肯定感を高めた。</p> <p>②自分とは違う意見の良さに目を向けることを大切にした授業を展開し、多様性を認め合える素地を養った。</p> <p>③今年度は地域と関わらず、可能な限り地域愛を意識させるよう心掛けた。</p> <p>④職員は人権感覚を維持し、道徳の授業では、自分の課題を意識させ、価値の良さに気付き、実践しようという児童の意識を高めた。</p>	B
特別支援教育	<p>①各学年、単元の系統性を大切に、運動をする楽しさを味わえる学習を展開する。</p> <p>②子どもたちが自分自身の体調に気を配り適度に体を動かせるように、環境や場を整える。</p> <p>③給食委員会が、日々の献立やその日の給食に関わる情報を各クラスに発信する。</p>	<p>①コロナウイルス感染症予防のため、ボール運動をはじめ、実際に行えない領域もあったので、難しい部分もあった。しかし、活動できる領域に関しては、工夫をしながら行うことができた。</p> <p>②休み時間の校庭の使用に制限があったため、これまでより外遊びの頻度は減ったように感じる。一方、手洗い等自分自身の体調管理についてはどの児童も気を配り、日々過ごすことができた。</p> <p>③ぱくぱくだよりの発信を毎日行い、全校児童に食育に繋がる情報を伝え続けた。</p>	A
児童生徒指導	<p>①配慮を要する児童の具体的な支援について、年間3回と、大きな行事の前に全職員で共有する機会を設け、指導に生かすとともに、どの職員も同じ対応ができるようにする。</p> <p>②通級指導教室、特別支援教室で指導を受けている児童の個別的教育支援計画と個別の指導計画を保護者と話し合いながら作成していく。</p>	<p>・コロナウイルスの感染拡大予防に伴う臨時休校の影響で、配慮を要する児童の具体的な支援については、計画していたことができなかった。大きな行事も全学年合同のものが行われなかったため実施しなかった。縮小版ではあったが、どの職員も同じ対応ができるように研修した。</p> <p>・個別的教育支援計画は、面談等で保護者と共通理解をした上で、対象児童について新しい形式で作成した。特別支援教室で指導を受けている児童についても作成を呼びかけてきた。</p>	B
健やかな体	<p>①養護教諭、栄養教諭、学校栄養職員、学校図書館司書なども、学級担任とともに児童の指導にあたる。</p> <p>②委員会の組織を毎年見直し、子どもたちの活動が主体的になるように支援する。</p> <p>③子どもの自主性を重んじ、児童自身が集団活動を意識して生活していくようにする。</p>	<p>①養護教諭、栄養教諭とのつながりはバイキング給食、薬物乱用防止教室では、授業をすることができた。</p> <p>②様々な制限の中だったので、既存の委員会のできる活動を行った。</p> <p>③集団での関わりが難しい状況だったので、意識づけができなかった。</p>	B
地域連携・学校運営協議会	<p>①地域の豊かな自然教育を生かした教育活動の充実に努め、体験学習を通して、地域の「人」とのつながりを深め、地域のよさを実感できるようにする。</p> <p>②「横浜の時間」や生活科を中心に地域で体験的に学ぶ機会を積極的に設け、他者との関わりの中で一人ひとりの自己有用感を高める。</p> <p>③学年に応じて、地域住民や企業がかかわる学習活動を年間計画に位置付け、学ぶことや働くことの意義を考え、働いている方の思いや願いを知ることができるようにする。</p>	<p>①町探検を通して地域の「人」とつながるようにした。獅子ヶ谷のよさを伝えたいという思いも、個々で内容や方法を考え、伝えることができた。</p> <p>②地域で体験的に学ぶ機会を多く設けることができなかったが、他者との関わりの中で、自分にできることがあることを実感でき、自己有用感を少しずつ高めていくことができた。</p> <p>③自分を見つめ直す時間を設け、学ぶことや働くことについて調べたり、家の人に話を聞いたりする中で、自分がやりたいことやこれからのように歩んでいけばよいのか考え、未来予想図をえが</p>	B
自分づくり教育(キャリア教育)	<p>①体験学習や地域の「人」とのつながりを通して、豊かな自然環境を生かした教育活動の充実に努める。</p> <p>②安全訓練の中に外部の方からの指導講評や体験を取り入れる。</p> <p>③毎月の安全点検で児童が安全な環境で学習活動に取り組むことができるようにする。</p> <p>④全校児童に環境保全の意識を定着できるよう、啓発ポスターやビデオ放送などに取り組む。</p>	<p>①コロナ禍による制限がありつつも、5年生の稲作体験学習や3年生の横溝屋敷見学など地域の「人」とのつながりを通して、豊かな自然環境を生かした教育活動を行うことができた。</p> <p>②コロナ禍のため、外部の方を招くことができなかったが、コロナ禍でもできる体験を伴った安全訓練を実施することができた。</p> <p>③年度初めに安全点検箇所を見直したり、点検項目を精査したりすることで、児童たちの安全な環境を確保することができた。</p> <p>④ビデオ放送はできなかったが、牛乳パックリサイクルのポスターを掲示することで、全校児童の環境保全の意識を高めることがで</p>	B
	<p>①家庭、地域、関係機関との連携を図り、地域の教育力を効果的・効率的に活用し、より豊かな教育活動へとつなげる。(授業サポート、見守り隊、情報教育)</p> <p>②「学校だより」のほか、「学校HP」の内容を充実させ、学校の情報発信に努める。</p> <p>③教育懇話会で各地域の代表者の方々や学校運営協議会の意義と役割について共有し、2022年度の協議会設置に向けた準備を行う。</p>	<p>①見守り隊は7月より継続的に実施し、定着した。5年稲作体験で講師を招いたり、3年のまちたんけんでは、近隣の農家や商店を担当が取材して、ビデオを撮り、授業の資料として扱うことができた。</p> <p>②授業参観等がコロナ禍で中止になったので教育活動については、学校ホームページに週に1、2回更新するなど、なるべく学活生活について知ってもらえるようにした。概ね好評であった。</p> <p>③コロナ感染症予防を踏まえ、今年度は、書面にて学校運営の報告を行った。</p>	B
	<p>①学年研で、積極的に専任を交えていじめ防止に向けての情報共有を行う。その情報を旧番指導部と共有し、専任が取りまとめ、対応に</p>	<p>①②ともに、職員間での連携を密に行い、積極的に情報を共有する仕組みを、対応にあたることができた。</p>	

いじめへの対応	<p>と117。その情報と児童指導等即不審の発生が検出された。対応にあたる。②毎月行われる「いじめ防止対策委員会」において、各学年の情報を、学年、学校全体で共有し、対応にあたる。③「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を、専任が中心となり、学年や学級で積極的に活用できるようアドバイスする。④いじめ防止アンケートを年2回行い、いじめの未然防止及び、早期発見、解決に役立てる。</p>	<p>③に関しては、コロナ禍による制限もあり、うまく活用できなかった部分もあるので、来年度は取り組み方を工夫しつつ、より活用していけるようにしていきたい。 ④も、アンケートを行うことで、児童の実態の把握やいじめの未然防止及び早期発見・解決に役立てることができた。</p>	B
人材育成・組織運営 (働き方改革)	<p>①メンターチームを中心に若手教職員の育成を図るとともに、ミドルリーダーや学校運営の中心となる職員を育成する。職員の個性を活かしつつ、学校や児童の実状を把握し、特色を生かした組織作りに努める。 ②「チーム獅子ヶ谷」という意識を高め、情報の共有化を図り、常に「報告・連絡・相談」を行うようにする。また、月1回の教務会・職員会議、週1回の学年研を開催し、学校運営を組織的に行う。 ③組織改編や会議の精選、事務作業の軽減等、業務の効率化を図り、働き方改革を促進する。</p>	<p>①メンターチームによる授業研を通して、若手教職員の育成を図った。コロナ禍のため、全体の授業研を開催できなかったことが課題である。 ②今年度より、月1回の教務会・職員会議、週1回の学年研を年間を通して実施し、学校運営を組織的に進めた。また、議題の精選と事前連絡を行い、会議の時間を短縮した。 ③午前5時間40分授業を実施し、児童の学習効果の向上と職員の働き方改革を進めた。下校時刻が25～35分早くなることにより、放課後の会議の時間や教材研究の時間を確保した。</p>	A
ブロック内評価 後の気付き	<p>○各小学校別に児童の情報交換を行った。本年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、小中研究会を行うことはできなかった。次年度講演会を開催し、小中合同で研修を行う予定。 ○次年度、道徳教育の大切さを再認識し、小中共通の課題、小学校、中学校それぞれに見られる課題を認識し、今後の教育活動に役立てたい。 ○児童指導、生徒指導における小中連携は重要である。より良い学校教育を実践していく上で、今後も継続して行う必要性がある。</p>		
学校関係者評価	<p>「まちとともに歩む学校づくり懇話会」の委員の皆様には、書面にて学校運営報告を行った。 令和4年度に「学校運営協議会」を設置すべく、委員の皆様と調整しながら推進を図っていく。</p>		
中期取組目標 振り返り	<p>○コロナ禍の中、活動が制限されている中で、従来の取組を見直す機会が得られ、本当に必要なことが何かということが浮かび上がってきた。 ○児童の生活に落ち着きが見られるようになり、安心して学校生活を送ることができていた。 ○40分授業による授業改善及び働き方の改善につながった。来年度以降引き続き行っていくことで、児童、保護者が学校に対する安心感がより得られるようにしていく。</p>		